

すきなたかひろ  
**杉田貴洋**

法学部 教授

コーポレート・ガバナンス、ファイナンス、M&Aなど、株式会社をはじめとする会社に関する規律を学ぶ。少人数ゼミだが、大学院生も参加する。株式会社に関する

私は、商学部と法学部を卒業した。

会計学の守永誠治ゼミでは、ゼミの後、朝まで飲むのがお決まりのコースで、毎週その日が本当に楽しみだった。話題はゼミの続きから始まって次々と展開し、友人たちから大いに刺激を受けた。そのうちの一人、太田康広君（経営管理研究科教授）が大学院に進んで研究者になるという。私も触発されて、やってみようと思った。それまで聞きかじった中で何を専門にしようかと考えたときに、漠然とやれそうに思ったのが商法だった。今振り返って、「やれている」とはとてもいえないが、ともかくそのときはそう思った。法学部に入って、出会ったのが当時30代の山本爲三郎先生、厳しくも温かい指導をいただいたいて、考えたことを論文にまとめるといふことを一から学んだ。再び毎週朝まで飲む生活が始まった。今度の酒席は、先生も一緒だった。

商法学はそのための素材にすぎない。ゼミに所属すれば、友人・先輩、先生から刺激を受ける。いろいろな言葉に刺戟を受け、自分でも何か読んだり考えたりすることで血肉になっていく。そのとき読んだり考えたりするのは、必ずしも法律のこととは限らない。結構なことである。お仕着せでない、自分で探り当てたものこそ価値がある。そうした場としてのゼミを提供する立場になったときに、私がすべきと信ずることは、学生にそれなりのハードルを課すことである。商法について、読み、考え、書くことを課すのが、ゼミの担当者としての私の役割である。学生は、それを切り抜けるため、頭をフル回転させ、情報を集め、仲間同士協力もするだろう。そんなつもりで、私は学生と接している。

現在の状況で、会食にも合宿にも行けない。学生には気の毒な状況だが、こんな中でも若い彼らは互いに刺戟し合い、何かを見つけるものと信じていたい。

## 改正の多い法領域こそ「基本を大切に」

おしまかずき

**大島一輝君** 法学研究科助教(有期・研究奨励)・法学研究科博士課程3年

商法・会社法・金融商品取引法を中心に、最近の裁判例や、学説の対立がある論点などを研究しています。これらの法領域は、経済の発展に合わせて、頻りに改正されます。そのため、常に最新の動向をフォローすることが求められます。同時に、変化に富む法領域だからこそ、場当たりの議論にならないように注意しなければなりません。杉田研究会では、用語の定義や条文の趣旨など、基本の確認を重視しています。2020年度はリモート開催でしたが、例年は、ゼミ対抗のソフトボール大会に参加し、夏には河口湖・九十九里浜などで合宿を行うなど、交流を深めています。



# SFC TOUCH LAB：触れることの科学

なかたにまさし  
仲谷正史

環境情報学部 准教授

心理評価・神経科学・工学を組み合わせ、触知覚現象を解析し、人間の知覚メカニズム解明に取り組んでいます。学部24名、大学院5名が所属しています。

SFCでは学部ゼミは研究会と呼びます。TOUCH FAB：触樂ものづくりとTOUCH SCIENCE：触覚の科学の2つのゼミを開講しています。前者は3Dプリンタ技術を利用した触感再現など、直接に触れる物体を制作します。COVID-19下のオンライン授業では、映像のような視聴覚メディアを通して触感を「想起させる」方法論を考えるために、実際に学生が作品を作りながら検討しました。後者のサイエンス研究では、物体が持つ物理特徴と人間が想起する触感イメージとの関係を理解します。物体の物理特性を計測するだけでなく、人間の感性評価を行いそのデータを多変量解析することで物性と想起される触感との関係を考えました。学部ゼミでは、身の回りの日用品（化粧品、食品）を事例にしながら検討しますが、これは事例研究から始めて、一般化に向けた触覚研究に結びつけるのが狙いです。研究分野の魅力に触れたことで、大学院に進学する学生も増えました。

修士・博士課程の学生で構成する研究室は、触覚のように言語化するのが難しい、体験しないとわからない感覚を取り扱うデータサイエンスと、対象物の特性を調べる計測工学を組み合わせることが主な研究アプローチです。具体的な研究対象物があると触覚研究は考えやすいので、SFC内外と事例研究を共同で推進しながら、研究を遂行し学術論文にまとめるまでの研究スキル獲得をゴールにしています。

日々体験しているけれども、大人になると注意を向けられない感覚⇨触覚について考えることは学生にとって新鮮に感じるようです。学生との議論を通じて私自身が発見したことは、触覚を理解することは理解の様式の理解（メタ認知の理解）にもつながりうるということでした。触覚そのものに関する知識を深めるとともに、物事の根源を理解する方法に多様な選択肢があること、その一つの方法が触覚を通して考えることであることを学生には伝えたいと考えています。

## 多様な研究を通じて、広い視野を養える環境

木曾律子君 政策・メディア研究科修士課程2年

本研究室では、触覚の基礎科学を応用し、人間のさまざまな感覚や知覚の解明に取り組んでいます。研究室の特徴は、学生本人の興味関心に基づきつつも、触覚研究の視点を重ねて研究テーマを決める点です。食や音楽、ダンスなど多種多様な研究は、触覚の視点から眺めなおすという点を共通に持ちます。触覚を解明するために開発されてきた物理特性計測、動作解析、ヒト心理測定法を適切に組み合わせた、定量化研究が主な手法です。仲谷先生は、学生一人一人に対して親身になって相談に乗ってくださいます。また、学生自ら開催するサブゼミでは、お互いが持つ専門視点や研究スキルを交換し研究に生かしています。

